日本古典文学全集

井原西鶴集 三

校注・訳
谷脇理史
神保五彌
暉峻康隆

小学館・刊

井原西鶴集　三　　日本古典文学全集 40

昭和47年4月30日　初　版発行
昭和51年11月30日　第四版発行

校注・訳者　谷脇理史（たにわき まさ ちか）
神保五彌（じんぼう かず や）
暉峻康隆（てるおか やす たか）

発行者　相賀徹夫
東京都千代田区一ツ橋2-3-1

印刷所　凸版印刷株式会社
東京都台東区台東1-5

発行所　株式会社　小学館
東京都千代田区一ツ橋2-3-1
〔郵便番号〕101〔振替〕東京8-200
〔電話番号〕編集 東京03-264-8571
製作 東京03-230-5333
販売 東京03-230-5739

©M. Taniwaki　K. Zinbo
Y. Teruoka　1972
（著者検印は省略いたしました）

造本には十分注意しておりますが，万一落丁，乱丁などの不良品の場合は，おとりかえいたします。

目次

解説……五
参考文献案内……六三
西鶴略年譜……七三
凡例……八一

日本永代蔵

巻一……八七
巻二……一一五
巻三……一四五
巻四……一七三
巻五……二〇三
巻六……二三五

万の文反古
巻一……二六五
巻二……二八七
巻三……三〇九
巻四……三三一
巻五……三五三
世間胸算用
巻一……三八一
巻二……四〇七
巻三……四三三
巻四……四五九
巻五……四八三
西鶴置土産
巻一……五一一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

巻二……五三九
巻三……五六三
巻四……五八三
巻五……六〇五

口絵目次

京大阪名所祭礼図屏風……1
短冊……5
西鶴時代の貨幣……6
駿河町越後屋呉服店大浮絵……8
捕鯨絵巻……10
初板本（日本永代蔵ほか）……12

解説

一　西鶴晩年の作風

ここに晩年と称するのは、元禄元(一六八)年・四十七歳から、没する元禄六年・五十二歳までの、生理的晩年を意味することはもとよりであるが、より以上に、その文学活動における決算期、精神・対象・方法ともに主体性を確立し、きわめてユニークで近代的な作品を残しているという、文学上の晩年を意味する。作品としていえば、

一、『日本永代蔵』(元禄元年正月刊)六巻六冊。

二、『西鶴織留』(元禄七年刊の第二遺稿)。

『日本永代蔵』と三部作にする予定で、元禄元年中に引き続いて執筆したけれども、種々の理由によって中絶放棄した『本朝町人鑑』(二巻)と『世の人心』(四巻)とを、門人の北条団水が合わせて六巻六冊とし、『世の人心』のために書いてあった西鶴自序中の一語をとり、「織留」と題して刊行。

三、『万の文反古』(元禄九年正月刊の第四遺稿)五巻五冊。

元禄三、四年の間に成立した書簡体短篇小説集で、題簽は「西鶴文反古」。作者命名の「万の文反古」は内題である。

四、『世間胸算用』(元禄五年正月刊)五巻五冊。

五、『西鶴置土産』(元禄六年冬刊)五巻五冊。

元禄六年の病中の遺稿を、同年八月十日に西鶴が没してから、多分百か日に当たる頃、門人の北条団水が追善の心をこめて刊行した第一遺稿。

以上の五部が晩年の主流をなす作品である。

これらの作品群は、偶発的に書かれたものではなく、『日本永代蔵』を起点とする誠実な魂の軌跡として把握しうるという点において、印象はきわめて鮮烈である。しかも初期の好色物シリーズ、中期の武家物を主とする説話文学群に対して、彼の属する町人の運命を左右する金銭によって生ずる悲喜劇を一貫して追求しているという点もユニークである。

イデーと現実の相剋

西鶴の晩年を画する町人物シリーズの第一作『日本永代蔵』が刊行されたのは、貞享五(一六八)年正月であるが、その初稿の成立は、私の提言によって、ほぼ貞享三(一六六)年中と認められ、現在では六巻のうち四巻までが初稿か、五、六巻が初稿かを考証する段階に来ている。しかし私が初稿成立の時期を問題にしたのは、『日本永代蔵』のテーマが、『男色大鑑』(貞享四年正月刊)や『武道伝来記』(同年四月刊)などの武家物を経過してから成立したのか、それ以前に成立したのかという点にあったので、どの部分が初稿と決定しても、私の論点に変化はない。

武家物以前、貞享三年中には『日本永代蔵』の初稿が成立していたということは、この町人の立身出世談というテーマが、初期の好色物シリーズ、とくに『好色一代男』や『好色二代男』などに直結しているということである。処女作の『好色一代男』は、町人の可能性を享楽と消費の世界に設定した作品である。だがその「第一の可能性」を、作者は早くも第二作『好色二代男』で、みずから否定している。好色は経済生活の破滅の因という現実的な認識によってであった。その認識がモデルと結びついたところに成立したのが、好色による狂乱と破滅を描いた『椀久一世の物語』(貞享二年二月刊)である。

設定した「第一の可能性」に挫折した西鶴が、その翌貞享三年に、いち早く「第二の可能性」を設定したことは、きわめて必然的である。しかもその『日本永代蔵』の初稿「本朝永代蔵」(巻一の内題)のテーマは、挫折した消費面における可能性と表裏一体をなす生産面における可能性、それこそ町人の存在意義である経済生活における可能性を設定することであった。

惣じて、親のゆづりをうけず、その身才覚にしてかせぎ出し、銀五百貫目よりして、これを分限といへり。千貫目のうへを長者とは云ふなり。(巻一の一)

といい、また、

惣じて大坂の手前よろしき人、代々つづきしにはあらず。大方は吉蔵・三助がなりあがり、銀持になり、その時をえて、詩歌・鞠・楊弓・琴・笛・鼓・香会・茶の湯も、おのづからに覚えてよき人付合ひ、むかしの片言もうさりぬ。(巻一の三)

という発言を引用するまでもなく、名もなく貧しい若者たちに、夢と希望を与えるにあった。当然「大福新長者教」というサブタイトルが示しているように、具体的には立身出世談を描くことになった。そしてこれまた当然のことながら、一代男的な好色と贅沢への警告をテーマとする数章が登場している。

さて『日本永代蔵』は、寛永期に発足した貨幣経済時代の出世町人をモデルとした、事実性の強い作品である。だがそのモデルの大半は、個人的な才能や努力が通用した商業資本主義(商品取引資本と高利貸資本)発足以前、寛文期(一六六〇年代)以前の資本蓄積時代に成功した町人たちである。才能と資本を生かして成功した商業資本主義時代のモデルは、天和三(一六八三)年に現金・切売り・仕立売りのデパート式商法で成功した、越後屋こと三井八郎右衛門ただ一人にすぎない。

それは西鶴の時代錯誤であった。だから巻一で、「惣じて、親のゆづりをうけず」、自分の才能と努力で成功すべきであると主張した彼が、巻六では「親よりゆづりなくては、すぐれて富貴にはなりがたし」といわざるをえなかった。そしてそれは、「ただ銀が銀をためる世の中といへり」(巻二)という、資本が個人の才能や努力に優先する現在進行中の商業資本主義体制を認識し

た結果にほかならない。おのれの時代錯誤を、創作の過程における現実認識によってみずから否定するという『日本永代蔵』の矛盾は、これにとどまらない。

銀が銀をためる時代であるだけに、成功の第一条件である資本を獲得するために、町人たちがモラルを無視して狂奔する現実を、彼の冷徹な目は見のがすことができない。「世は抜取りの観音の眼」(巻三の三)、「心を畳込む古筆屏風」(巻四の二)、「茶の十徳も一度に皆」(巻四の四)などでそれを描いたあげく、彼はいう。

いかに身過なればとて、人外なる手業する事、たま〳〵生を受けて世を送れるかひはなし。その身にそまりては、いかなる悪事も見えぬものなり。いと口惜しき事なれば、世間にかはらぬ世をわたるこそ人間なれ。これを思ふに、夢にして五十年の内外、何して暮せばとてなるまじき事にはあらず。(巻四の四)

悪事をはたらいて成功するくらいならば、わずか五十年前後の人生なのだから、貧しくとも人間らしくまっとうに生きるべきだ、といっているのである。不倫な現実を目前にして、作者の倫理感がほとばしり出たのであった。致富は町人の目的であるが、しかしそれは正しい手段によって達成さるべきである。町人である前に貧しくとも人間であれというこの発言は、「新長者教」と副題し、第二の可能性を設定するという『日本永代蔵』の意図と全く矛盾する。町人として成功することと、人間として正しく生きることが一致しがたい現実を、彼は見過ごすことができなかったのである。

三十章を個別的に見れば、一章一章に目立った矛盾はない。だが全体として見れば、以上のような二大矛盾をはらんでいる。だがこの矛盾こそは、モラリストである西鶴、それ以上に理想やイデオロギーよりも現実を尊重するという、作家としての本質にもとづく自己矛盾であるという意味において、私は高く評価したい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文学作品として失敗作であるというだけであれば、それは作家個人の痛みにとどまる。だが『日本永代蔵』のテーマは、町人の運命を左右する性質のものであるだけに、露呈した矛盾を個人の痛みとして葬り去ることはできない。才能や努力しか持ち合わさない無産町人大衆に、それだけでは通用しない「銀が銀をもうける世の中」であるという現実をつきつけ、しかもそういう彼等にとって唯一の可能性である不正なる手段を封ずるということは、彼等に絶望を強いる以外の何ものでもない。耐えるだけの人生を押しつけるつもりで『日本永代蔵』を書いたのではないとすれば、耐えるには耐えるだけの意義を説得しなければならない責任が、この作者には生じたはずである。運命共同体の一人として、耐えるに甲斐ある人生であることを証明しなければならない焦躁と苦悩が、中絶した三部作の『本朝町人鑑』二巻と『世の人心』四巻（西鶴織留）の筆を、あわただしく彼にとらしめたのであった。

「本朝は天照太神元年より今元禄二年の初春まで二百三十三万六千二百八十三年」（『本朝町人鑑』巻二の一）と、元禄二年正月の刊行を目ざして筆をとったのに、『本朝町人鑑』は二巻九章でなぜ中絶しなければならなかったのか。その理由を作品から読みとることが、この時点における作者の心にふれる唯一の手段である。

まず「本朝町人鑑」というタイトルの意味するところを考えてみよう。巻二の一に、「是皆町人の中の町人鑑といへり」とあるところから見ても、正義人道にもとらぬ亀鑑たるべき町人像を提示するにあったと思われる。しかし考えてみれば、それは「大福新長者教」というサブタイトルを有する『日本永代蔵』において、現実にこだわったためになさるべくしてなされなかったテーマにほかならない。だからこそ今あらためて創造者としての責任をとり、耐えるに甲斐ある人生であることを証明しようとしたのであろう。この心の軌跡は、私情私怨にもとづいて行動した『男色大鑑』の武家説話や『武道伝来記』を書いたあげく、

弓馬は侍の役目たり。自然のために知行をあたへ置れし主命を忘れ、時の喧呰口論自分の事に一命を捨るは、まことある武の道にはあらず。義理に身を果せるは至極の所、古今その物語を聞き伝へて、その類をここに集る物ならし。（武家義理物語序）

といって、『武家義理物語』を書いたプロセスと、まったく同じパターンである。

しかし市井の一戯作者にすぎない西鶴に、なんのなすところがあろう。仏教の因果応報思想や儒教の賤富思想まで動員して善悪の帰趨を示し、心正しければ神仏の恵みによって富おのずからきたり、あるいは心安らかな人生であることを強調している。これは自分の肉眼でつかみ取った現実に優位をあたえるという、西鶴本来の姿勢ではない。まさしく窮余の一策であった。『日本永代蔵』で彼が発見した現実は、宗教や道徳を寄せつけない非情な資本主義体制であることを承知していながら、あえてその無力な思想と結託して読者を説得しようとしたところに、西鶴の苦悩が生まれ、そしてそれはそのまま作品の破綻につながっているのである。たとえば巻一の二「品玉とる種の松茸」を見よう。

港町にひどく金払いの悪い問屋があった。ある年の大晦日の夜、銀を取りに来たよその手代が、請取帳に印判までおしながら、銀八百匁(約四十万円)を革袋に入れないで帰った。それを亭主は隠して、あとで手代が引き返して来てわびたが、たしかに渡したと言い切ったので、手代はぜひなく親方への言いわけに菩提寺で自害してしまった。やっぱり問屋の亭主が隠したのだと、世間で評判になり、問屋はしだいに商売が手薄になり、女房は両手のない片輪の男の子を生んで、見世物にされて世に恥をさらし、その家は目前に絶えた。「無理なる欲はかならずせまじき事ぞかし」と、一応、因果応報の結論を出している。だが西鶴はそれで口をつぐむことができない。

無理なる欲はかならずせまじき事ぞかし。ならねばなるやうに世わたりはさま〳〵あり。然れども望姓持たぬ商人は、随分才覚に取廻しても、利銀にかきあげ皆人奉公になりぬ。よき銀親のある人はおのづから自由にして、何時にても見立ての買置利得る事多し。

人間であるがゆえに正しく生きるべきだという作者の願いと無関係に、町人が致富という目的を達成するためには、資本以外に頼るべきものはない。だから、金融業者から資本を借りて商売している町人は、儲けはあらかた利息に吸い上げられ、結局は

人奉公、資本家のために働くことになってしまうのだという西鶴は、自分が提示したそらぞらしい因果応報説話など、何の説得力もないことを、誰よりもよく知り抜いていたのである。読者を欺くことはできても、自分を欺くことのできない西鶴であるがゆえに、矛盾にみちた自己分裂を露呈したのである。教訓の仮面をかぶったりはずしたりする西鶴の錯乱は、巻二の四「塩うりの楽すけ」においても、はっきりと現われている。

「粗食を食らい水を飲み、肱を曲げて之を枕とす、楽しみまたその中に在り、不義にして富み且貴きは、我に於て浮雲の如し」という儒教の賤富思想をそのままに、清貧を楽しんでいる塩売りの老人夫婦が粟田口に住んでいた。せわしい菊の節句の前日、中立売の中程の呉服所で、新築の棟上げの祝儀に餅などまいて、人々が群がっていた。そこへさしかかった塩売りの老人が、百二十両入りの縞の財布を拾ったが、落し主がわからないので、自分の住所氏名をふれて帰った。するとその夜、落し主の絹屋の手代が訪ねて来たので、礼金もとらずに返してやった。手代は恩を忘れず、雨風で老人が塩売りに出かけられない日は、ひそかに人に頼んで塩を二斗ずつ買いとらせた。手代はその心から万事調子よく、書絵小袖を発明して分限になったという。正直と報恩のめでたい果報話である。

ところが話はこれで終わらない。塩売りの近くにさる名医が住んでいた。ある日夕立のあと、下駄をはいて門に立ち、あたりの景色を眺めていると、塩売りがやって来た。それを見た名医があわただしく内へ逃げこんだので、家人が不思議に思ってわけを聞くと、「あれは今の世の聖人なり。聖人に足駄はきながら対面するもおそれあり。また近付ならねば、下駄ぬぐまでもなし。とかく御目にかからぬがよい」といわれたので、「あの老人を聖人とは、どういうことでしょう」ときくと、「今の世の中に拾った金を返すような聖人は、洛中洛外はおろか、本場の唐土にもあるまい」といわれたので、みんなもっともと納得して、この塩売りを恐れたという。

巻一の「品玉とる種の松茸」のケースと同じく、意図した正直と報恩のテーマは完了しているのに、わざわざ名医を登場せし

めて、塩売りの老人を非現実的な存在として戯画化しているのである。それもこれも、読者を説得するために設定した教訓説話のむなしさを、『日本永代蔵』を経過した今では、誰よりもよく知り抜いていたからである。自己を欺くことができないために、このような自虐的な自己分裂を露呈した作品を書き続けることは無意味であり不可能である。『本朝町人鑑』は中絶し、続稿の意志を放棄せざるをえなかったのである。

私の見るところでは、『本朝町人鑑』よりもややおくれて執筆された『世の人心』(四巻十四章)が中絶した理由は、いささか趣をことにしている。この作品は「世の人心」というタイトルが示しているように、前二作がともかく致富道とそれにからまるモラルを主題としているのに対して、主として中流以下の町人の私生活のトラブルや悲哀を主題としている。しかもそれはおおむねノンフィクションの身辺雑記的な世相随筆である。

町人の社交的教養についての芸道随筆、医者随筆、奉公人随筆、質屋随筆、伊勢参宮随筆、子煩悩随筆など、説話的な要素を取り入れようとしたふしはあるが、それもきわめて微弱で、女奉公人をテーマとした巻六の二「時花笠の被物」の章などは、三か所も改行しており、まったくの随筆形式になってしまっている。あとにも先にも西鶴の作品で、このように造型の意志を放棄した随筆形式のものはない。

＊本全集の『井原西鶴集』所載の作品や、他の活字本が改行されているのは、現代の読者の便宜をはかっての処置である。

もしこれが随筆形式の多い仮名草子時代の著作であったならば、世相随筆として板元も歓迎したであろうが、すでに西鶴自身の手によって、現実的な新説話時代を迎えた今となっては、このような随筆文学が、商品として通用する可能性はまずなかったであろう。この事が四巻十四章まで執筆していながら、西鶴が『世の人心』の完結を断念した理由の一つであろう。

また作者としても、失敗作であるとはいえ、前二作を経過することによって得た新しい視点がとらえた中下層町人の生活の種種相、貧しさゆえにゆれ動く人心をメモすることに熱中したのであろうが、ある時ふと冷静になってみると、造型の意志を見失

っていた自分に気づき、失敗作であることを認めざるをえなかったであろう。

三部作の第一部『日本永代蔵』は、大きな矛盾を露呈しながらも、ともかく刊行にこぎつけることができた。だがそのために生じた読者への責任をはたすべく筆をとった『本朝町人鑑』と『世の人心』は、見るも無残な錯乱の文学となって、中絶し放棄するに至った。だが錯乱せざるをえなかったその作家的良心のゆえに、それまでブルジョアジーの荷担者であった彼の視点は、中下層町人大衆の側に移動し、『万の文反古』や『世間胸算用』などの佳作を創作しえたのである。

新しい精神と方法の登場

元禄三年・四十九歳の西鶴は、一篇の小説も発表していない。それは前年、創作活動を行なわなかったということである。私見によれば元禄二年中の西鶴は、俳諧活動はもとより創作活動を行なえる健康状態ではなかった。年表がその事実を物語っている。この一年有余の沈黙と内省の時をへて、元禄三、四年の間に成立したのが、没後三年目の元禄九年に、これだけは遺稿の編纂者・北条団水の手をへずに、直接板元より出版された書簡体短篇集『西鶴文反古』(五巻十七章)である。ただし西鶴のつけたタイトルは、『万の文反古』(内題)であった。その自序の結びに、「ながながと読みつづけ行くに、大江の橋のむかし、人の心も見えわたりてこれ」とあるところから見ても、失敗した前作の『世の人心』というテーマに、新たなる精神と造型の意志をもって立ち向かった作品であると考えられる。その新しい精神について、自序は語る。

見苦しからぬは文車の文と、兼好が書残せしは、世々のかしこき人のつくりおかれし諸々の書物、これ皆人の助となれり。見苦しきは今の世間の状文なれば、心を付けて捨つべき事ぞかし。かならずその身の恥を人に二度見さがされけるひとつなり。

今度わたしが書いた作品は、世々の賢人が書き残した立派な内容の書物のように、読んで役に立つという性質のものではない。なぜならば、私が描いたのは、他人に知られたくない恥多い人間の生活や心だからである。皆さんが読まれて心の養いになるは

ずがない、といっている。

少なくとも『本朝町人鑑』を書くまでの西鶴は、『好色一代男』におけるように美意識で人間を裁断したり、正しく生きるべきだと主張したり、とかく美的・道徳的な批評精神が旺盛であった。教訓と娯楽(説話)の提供に、作家としての存在意義を求めていたようである。自分の仕事の社会的効用を考えるということは、作家ならずともである。その西鶴が、今や自分の作品の社会的効用を否定しているのである。これまでの作品とちがって、人間の恥部を描くのであるから、人の助けとはならないとあえていったのは、矛盾と錯乱の三部作を通じて発見した、資本がないためにみじめで滑稽な生き方を強いられている中下層町人の運命を、それでもなおかつ報告すべきであるという、作家としての主体的な使命感によるものと考えざるをえない。

作品の社会的効用を考慮せず、自己に忠実であることが読者に対して忠実であるのだという、この新しい主体的な創作意識を、西鶴は『万の文反古』に至ってようやく持つことができたのであった。しかもその恥多い生活は、主として破産や貧困という金銭にまつわるものであるだけに、それを描くに当たって、彼はもはや美的ないし道徳的批判をしようとしない。いや、そういう批判を寄せつけない、追い詰められたぎりぎりの生活を、時に誇張しながらありのままに描いている。そこには教訓に代わる警告の精神と、ごみのような彼等を受け入れるゆたかな境地があるのみである。

この新しい視点によってとらえた現実ないし題材には、当然のことながら文芸性や説話性がとぼしい。粋という美意識を内包する『好色一代男』や『好色二代男』の世界、ロマンスとセックスに彩られた『好色五人女』や『好色一代女』の世界、ドラマティックでヒロイックな『男色大鑑』や『武道伝来記』の世界、まがりなりにもスリルとサスペンスを伴う『日本永代蔵』の世界等々、これまでの西鶴は題材それ自身の文芸性や説話性に依存することの多いストーリーテラーであった。だが今度新しく取り上げた世界、主として経済的に追い詰められた名もなく貧しい町人の生活に、それらの要素が欠如しているとすれば、それを感動的に表現するためには、新しい方法をぜひとも必要とする。その内面的な要請にもとづいて西鶴が試みた新しい方法は、一通

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com